

## 体育センター25年

第六代センター長 森岡理右

体育センターの第一歩は、ピンク・ハウスから始まった。体芸テニスコートの脇に、今はひっそりと建つ平屋建ての古い小屋。総合体育館と、緑の芝生がびっしりとはえ揃っていた第一、第二サッカー場、ラグビー場。そして茶色のタータントラックが目まぶしい陸上競技場と体育合宿所だけがあった時代。格技体育館、球技体育館、水泳場、野球場などは、まだ青写真にも描かれていなかった。

一教室分にも満たないハウスの中は戸棚や黒板・白板で仕切られ、大石初代センター長はじめ4人の専任教員が狭い狭い個室風のスペースに陣取る。事務室は机四台分のみの空間であった。もっとも、体育合宿所に学長、副学長、事務局長らが机を置き、保健管理センターも同居していた筑波大学創世紀である。体育センターだけが堂々と別棟住まいであったのは、当時の大石先生の威風が効いていたのか、それとも学生教育の先頭に立つ体育センターの重責を大学幹部達が認めてくれていたためなのか。

宿舎の建設が遅れたために、東京・代々木のオリンピック記念青少年センターで集団合宿授業をしていた第一期学生たち、第一学群、体育・医学専門学群生たちが、必需品の長グツ（雨が降れば回りは泥の海であった）を携えて筑波入りしたのは昭和49年の6月。キャンパス、とはいっても体芸地区周辺と平砂宿舎周辺だけで今の20分の1程度か、は一気にはなやいだ。

体育センターの設置目的は、学生たちへの保健体育科目の授業実施、大学公開の意を体した様々な公開講座の実施と施設開放、そして施設設備の維持・管理を三大柱としている。このほか、教職員・大学院生へのスポーツ活動支援や課外活動の指導助言、そして調査・研究活動などもあるが、三大柱は不変の大目的であり、25年間、いささかのゆるぎもなく着実に実行されてきた。

標題を“25年”としたからには、その歴史を克明に明かすのが本来であるが、それは紙幅のゆえに許されることではない。

総数が約50,000人の学生教育をなし、492回の公開講座を開いて約25,000人の地域市民に奉仕し、調査研究活動を通じて全国の大学教育関係者のリーダーとなり（それぞれ、主な所は別表にて掲載）、センター関係者打って一丸、使命を遂行した。

いま、改めて思い起こすのは、それを成し遂げてきた教員・準研究員・事務官・非常勤講師各位の偉大さである。小生、昭和49年、50年度は非常勤講師をつとめ、以後は停年退官となった平成10年3月末まで教員として職を奉じた。体育センター25年の歴史のひとコマづつを丁寧に記録すべき義務がある、と考えるが、それは一人の目で刻んではいけない。私的な記憶は情に流されるし、正確さもない。正史は、のちの人々がまとめてくれるものと信じている。

去りゆくいま、大石三四郎先生を第一号とする体育センター勤務教員全62名（別表1）、迎和義専門職員が初めて座った勤務事務官全54名（別表3）、そして大石先生に強引に就かされた感のある阿部博、中山正吉両準研究員から数えると計80名に及ぶ準研究員全員（別表2）、非常勤講師各先生（別表4）の名を明記することだけを小生の仕事とさせていただく。

筑波大学体育センターの設置目的は前記のとおりであるが、そこに記されていない重大な責務があ

ったことを、いましみじみと感じ入る。すなわち、準研究員名簿を見ると、彼らの現在勤務先は、北は北海道から南は鹿児島まで、ほぼ日本全土に展開する国公立大学や研究・教育機関に及ぶ。それぞれ職務に専念し、日本体育学会やスポーツ界をリードする強者に育てていることは我々の誇りである。“幹部養成”機関としての体育センターの役割もあったことをここに報告して、この稿を終わりとしたい。

※別表1, 2, 3, 4は資料Iに記載いたしました。